**日曜午後例会「瞑想と霊性の生活」勉強会　第１１回　（２０１９年１２月８日）**

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**勉強範囲：『瞑想と霊性の生活』(MEDITATION AND SPIRITUAL LIFE)**

**翻訳本：第１部　霊性の理想　第１章　霊性の探求　P27~28**

**原著本：PARTⅠ　THE SPIRITUAL IDEAL　１．THE SPIRITUAL QUEST　 P11~12**

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**聖者たちの模範【Example of Saints】（の続き）**

**・📖 （P27 L1）**

***プラフラーダは、プラーナのなかで讃えられている聖者の一人で、子供の頃から主ヴィシュヌへの熱烈な信仰を持っていた。悪魔のような父親は、あらん限りの手段で息子を世俗の道に引き戻そうとした。しかしこの若者はすべての過酷な試練に勇敢に立ち向かい、忘我の境地で主を讃え続けた。主が彼の前に姿をあらわされ、望むものをおたずねになられたとき、彼は応えて言った。***

・原著（P11 L30）*Prahl**āda was an example of the saints praised in the Purāṇas. Even from childhood he had intense devotion for Lord Vi*ṣ*ṇu. His demoniacal father tried all in his power to turn the boy to the worldly path. But the young boy braved all the cruel ordeals and went on with his ecstatic praising of the Lord. When the Lord appeared before the boy and asked him what he wanted, he said:*

プラフラーダは『バーガヴァタム』の中に出てくる有名な聖者です。彼の父親はヒランニャカシプ（Hiranyakashipu）という悪魔たちの王でした。

先月（11月30日）の多治見講話では「創造神ブラフマーには神、悪魔、人間という三人の子供がいる」という話をしましたが、彼らたちの特徴について覚えているでしょうか？　『バガヴァッド・ギーター』でも述べられていますが、すべての生き物はサットワ、ラジャス、タマスという３つの性質を持っていて、異なるのはその割合だけです。つまり、神々はサットワ的性質を多く持ち、悪魔たちは残酷（cruel）、野心などのラジャス的な性質が多く、人間はラジャスとタマスの性質がほとんどでサットワは少しです。

あとで『バーガヴァタム』のプラフラーダの物語を読みますが、その前に少しあらすじをお話します。

宇宙は神々が支配していましたが、それを嫉妬した悪魔たちが自分が宇宙の支配者になりたいと考え、神々との戦争を起こし、勝利しました。神々は、天国で宇宙を支配していましたが、その場を追われ、悪魔の王が天国に行って悪魔による宇宙の支配が始まりました。

悪魔が支配するまでは、人間たちは火の儀式などをして神々にお供えをすることで神々を喜ばせ、神々は人間をサポートし、守っていました。宇宙のバランスはそうすることで成り立っていたのです。しかし悪魔に人間がお供えをしても、悪魔は人間を守ることはしません。なぜなら悪魔の性質はラジャス的だからです。悪魔の王ヒランニャカシプは宇宙のすべての生き物に対して「私以外に神はいない。これからは私のことだけを尊敬し、私を喜ばせるためだけに礼拝し、私のためだけにお供えしなさい」と言いました。そして宇宙のバランスは崩れていきました。

しかし悪魔たちの中に例外もいました。それがプラフラーダです。彼はヴィシュヌ神を尊敬し、あがめていました。しかし父ヒランニャカシプの最も嫌いな神、一番の敵もヴィシュヌでした。ヒランニャカシプはこのように宣言しました、「宇宙の誰も、ヴィシュヌに祈ってはならない。ヴィシュヌに礼拝をしてはならない、ヴィシュヌの名前を唱えてもならない。神は私だけである。別の神はいない」と。

いまや宇宙（3つの世界［注１］）のすべての生き物はそれに従わなければならなくなりました。しかし、自分の息子だけは、自分の言葉に従いませんでした。父親がいくら「私だけが神である」と言っても、プラフラーダは「ヴィシュヌが本当の神様です、ヴィシュヌが一番の神［注２］です。ヴィシュヌの恩寵とヴィシュヌの願いですべてのことができています」と父に反対し、従いませんでした。

それでは『シュリーマッド・バーガヴァタム』から少しずつ読んでください。

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**・📖 （『シュリ―マッド・バーガヴァタム』第7部第1章　P142 L11）**

***さて、ヒランニャカシプには、プラフラーダと呼ばれる息子がいました。ところがどうしたことか、このプラフラーダは、幼少の頃から主ヴィシュヌを敬愛していました。王は、全世界から払拭しようとしている悪が、まさに自分の家庭から育とうとしているのを見て、とても厳しい二人の教師シャンダとアマルカに息子を預けました。そして、息子にヴィシュヌの名が語られるのを決して聞かさぬよう、厳しく言いつけました。教師たちは、王子を自分たちの家に連れて帰り、同じ年ごろの子供たちとともに学ばせました。ところが幼いプラフラーダは本から学ぼうとはせずに、すべての時間を、学友たちに主ヴィシュヌの礼拝法を教えることに捧げました。二人の教師たちはこれを見て仰天しました。なぜなら暴君ヒランニャカシプを非常に恐れていたからでした。彼らは王子にそのようなことはやめるよう、必死で説得しました。しかしプラフラーダは、呼吸をやめないのと同じほどにヴィシュヌをあがめ、ヴィシュヌについて教えることをやめませんでした。シャンダとアマルカは、自分たちのせいではないことを明らかにするために、この恐るべき事実──王子は、自分自身がヴィシュヌをあがめるだけでなく、他の学友たちにもそうするように教え、彼らを堕落させているという事実──を王に告げるのが最良の策であると考えました。***

***暴君ヒランニャカシプはこの事実を聞いて怒り狂いました。彼は少年を呼んで、王である自分こそが崇拝されるべき唯一の神であると教え、ヴィシュヌを礼拝しないよう、やさしく説き伏せようとしました。しかしそれは不可能でした。少年は、何度も何度も主張しました、『宇宙の主、遍在のヴィシュヌこそが崇拝されるべき唯一の御方です。王であるあなたでさえも、ヴィシュヌの御心にかなうあいだだけ、王座を保っているにすぎません』と。さらにプラフラーダはこう言いました、『たとえ全世界を支配したとしても、自己の感情を制御できないなら、すべてのうぬぼれは無意味です。制御されない心は、じつに私たちの最大の敵です。最も偉大な征服とは、自己の心の征服です』***

自分の心をコントロールできないのに、他の人をコントロールしようと試みても、無意味です。本当の意味の「強いOR強くない」の基準は、「自分の心をコントロールできているORできていない」ということです。ふつうの人は、ある人は有名とか、ある国が強いという基準で考えて、その答えとしてアメリカ大統領、アレキサンダー大王、ある人はヒットラーを挙げるかもしれませんが、それは違います。また、もう一つ、こういった面からも考えてみてください。たとえば大会社の社長は会社をうまくコントロールして上手に経営（マネージメント）しているかもしれませんが、家族のマネージメントはどうでしょうか？　奥さん、息子、娘のコントロールはできているでしょうか？　ヒランニャカシプを見てください。皆、彼の意見をききますが、息子だけはききません。彼にはどんな方法も役に立ちません。

大事は自分の心のコントロールです。もし、自分の心のコントロールができたら、最もパワフルな王よりも、その人のほうがパワフルです。私は50年くらい前、『King of Kings』（王の中の王）という映画を見ました。それはイエス・キリストについての映画でした。体の強さがあっても、欲望、野心、うぬぼれ、エゴがある限り心のコントロールはできません。イエスはそれができており心がきれいでしたから、王の中の王と言えるのです。このプラフラーダの言葉は、本当に、求道者のための大事な基準ではないですか？　「制御されることができないならあなたの心があなたの一番の敵になります。制御されることができたならあなたの心があなたの一番の友になります。制御された感覚と心があなたの一番の友」──それが一番大事で、一番難しいですね。『シュリ―マッド・バーガヴァタム』を続けて読んでください。

**・📖 （『シュリ―マッド・バーガヴァタム』第7部第1章　P143 L15~p147 L9）**

この部分の内容は省略します。『シュリ―マッド・バーガヴァタム』日本ヴェーダーンタ協会出版を読んでください。［注３］

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

プラフラーダの物語を読んだところで『瞑想と霊性の生活』本文に戻りましょう。

**・📖 （P27 L5）**

***無知な人々が世間のものに対して抱く愛と同じほど強い愛をもってあなたを思うことができますように。またその愛が決して私のハートから去りませんように。***

・原著（P12 L3）*May I think of Thee with that strong love which the ignorant cherish for the things of the world, and may that love never cease to abide in my heart.*

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの『バクティ・ヨーガ』の中にバクティの定義がいろいろありますが、それの一つがこれと同じ内容です。

私たちはみずからの経験で、世俗的なものにいかに執着しているかをわかっているかもしれない。しかし、本当に、どれくらいそれが好きであるかは浅い考えではわかりません。深く内省しないとわかりません。だんなさん、奥さん、娘、息子、孫、友達、食べ物、飲み物、衣服、快適な生活のためのさまざまなもの、夏は暑いのでクーラーをつけなくてはならない、冬は寒いから暖房が必要です、毎日お風呂に入らなくてはならないetc.…そのような細かいことひとつひとつについて、深く内省すれば、わかってきます、私たちがどれほどそういったこと・そういったものが好きかということが。

そしてそれを理解しないと、このプラフラーダの祈りを理解することはできません。プラフラーダは「世俗的な人の世俗的なものへの愛」を例として使いましたが、この引用はとても興味深いです。ふつう、人はプラフラーダほど内省をしていないので、「おお、私はこんなに世俗的なものが好きなのか！」ということに気づきがありませんから。

あと（本文p30）でバララーム・ボシュの例が出てきますが（バララーム・ボシュはシュリー・ラーマクリシュナの偉大な在家の信者です。シュリー・ラーマクリシュナを世話し、彼を100回以上家におよびしました）、バララームがドッキネッショル寺院で初めてシュリー・ラーマクリシュナ（タクール）にお目にかかったとき、大勢の人が去ったあと静かに座っているバララームにタクールは「なぜここに来たのですか？」とたずねました。するとバララームは「神様はいますか？」と聞きました。「います」「神のヴィジョンは得られますか？」「得られます。しかしとても祈らないといけない。瞑想しないといけない。神の名を唱えなければならない」バララームは「私は長年そうしていますが、なぜ神のヴィジョンを得られないのでしょうか」シュリー・ラーマクリシュナは微笑んで「あなたは自分の子供を愛するほど、神を愛していますか？」。バララームは少し内省して「それほど愛してはいませんでした」と答えました。そのときバララームは初めて理解したのです、どんなにたくさん神について考えても、世俗のものへの執着あるあいだは神のヴィジョンは得られないと。

次の祈りを読んでください。

**・📖 （P27 L7）**

***わが主よ、たとえ幾千回うまれかわろうとも、つねにあなたへの揺らぐことなく、ひるむことのない不動の信仰を持ち続けられますように。***

・原著（P12 L6）*My Lord, should thousands of births fall to my lot, may I still always possess an unshakable and unflinching devotion to Thee.*

ふつうの信者はこのように祈りません。ふつうの信者は何を神に祈りますか？

参加者：解脱。

また生まれたく？

参加者：ない。

そうです、また生まれたくないです。プラフラーダと反対です。プラフラーダは「何回生まれてもかまいません」と言っています。

参加者：覚悟が違いますね。

ふつうの信者の目的と、全然違います。「何回生まれてもかまいません。大事なことは、神様のことを一秒も忘れたくない。一秒も神様の考えから離れたくない。いつもいつもあなたを思い出していたい」、それがプラフラーダの願いです。

参加者：「つねにあなたへの不動の愛がある」ことは、解脱よりも（そのことに）幸せを感じている、ということですよね？

（自分の）幸せは関係ありません。プラフラーダは「神様が好き」それだけ。自分のことなどまったく考えていません。生まれますOR生まれません、幸せですOR幸せではない──そのような基準で考えることはなく、神が基準です。神にたいする愛が中心です。

参加者：それがその人にとって、一番心にいいことだと…

それも考えていない。何も欲していません。Love for the sake of love.（愛のための愛）です。自分の幸せ、自分の心が気持ち良い、そんなことも考えません。Love for the sake of love.　愛のために愛するとき、それ以外の目的は全くなくなります。プラフラーダはその種類の愛が欲しいです。見返りが欲しい、解脱が欲しい、知識が欲しい、天国が欲しいということは何もない。Just love. （好きです）──それが信者の一番偉大な愛です。私という意識がなくなった、純粋な愛（pure love）です。もし、私という意識があると、その種類の考え──幸せ、解脱、いろいろ──についての考えが浮かびます。

次（2019年12月）の例会のテーマは何だか知っていますか？　「ラーマクリシュナ意識」（Ramakrishna Consciousness）、それは自分のコンシャスネス（意識）がない、という意識です。ですがふつうの信者は自分の意識も神様意識もあります。理想は神様意識だけ。

『ラーマーヤナ』の登場人物であるアハリヤー（Ahalyā）もプラフラーダと同じ祈りを捧げました。彼女はだんなさんから「石になる」という呪いをうけて、石になりました。ラーマ神様が彼女に触れて、また人間の形に戻りました。アハリヤーは「私は何回生まれてもかまいません。生まれ変わりが人間でなくてもかまわない。動物、それもブタであってもかまわない。どのように生まれ変わっても、私があなたのことを絶対に忘れませんように」と願いました。これはふつうの信者の願いと全く違います。もちろんスワーミージー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）のボディサットワ（bodhisattva）のアイディア（＝人間を助けるために何度も生まれてもかまわない）もありますけれども。シュリー・ラーマクリシュナもそう言っていますけれども。

これと同じ願いが、現代を生きた、シュリー・ラーマクリシュナからも発せられています。これは物語ではなく、史実です。

**・📖（p27L9）**

***現代ではシュリー・ラーマクリシュナが、神への熱烈な信仰の比類ない模範となられている。***

・原著（P12 L9）*In modern times Sri Ramakrishna stands as an unparalleled example for intensity of yearning for God.*

神への*yearning*、熱望です。熱はheat、そして欲望の欲──熱が出るほど欲することです。*intensity of yearning for God*──シュリー・ラーマクリシュナがそうでした。日本語ではなんと翻訳されていますか？

参加者：yearning は「信仰」、intensity of yearningは「熱烈な信仰」と訳されています。

intensityは辞書では「激しさ」「強力な」です。yearningはもちろん信仰ですけれども、しかし信仰だけでは深い意味が出ません。

**・📖（p27L9）**

***あらゆる相における神のヴィジョンを思い焦がれるあまり、彼は6年のあいだ、眠らることはなかった。***

・原著（P12 L10）*His longing for the vision of God in all His aspects was so great that he didn’t sleep for six years.*

信じられないですね、私たちは一日でも寝られないと、どうしてだろうととても心配します。シュリー・ラーマクリシュナは6年くらいも寝ずに、「マザー、マザー」と母なる神を呼んでいました。タクールはその「16分の１」と言いましたが、その「1000分の１」も、ふつうの人間にはできないです。

**・📖（p27L10）**

***昼も夜もきわめて強力な様々な霊的ムードのうちに過ごされたので、彼は気がふれていると人々に思われていた。事実、彼のムードは神聖な狂気の状態だった。彼の真の教えと会話を正確に記録した書物である『ラーマクリシュナの福音』のでは、神への渇仰心の重要さが非常に大きく協調されている。まさに、これこそ、シュリー・ラーマクリシュナが求道者たちすべてに教示された、最も重要な修行法だと言ってよいであろう。次の一節はその典型的な例である。***

・原著（P12 L12）*He spent his time day and night in various spiritual moods which were so intense that people thought that he had become mad. His was indeed divine madness. In the book The Gospel of Sri Ramakrishna which contains his authentic teachings and conversations, we find the idea of yearning for God stressed very much. Indeed we may say that it was the chief discipline that Sri Ramakrishna prescribed for all aspirants. The following passage is a typical example.*

『ラーマクリシュナの福音』にyearning（サンスクリット語でビャクラタと言います）の話が何回も出てきます。いただいたマントラをルーティーン（日常業務）のように朝と夜に少し唱えればそれで十分とか（もちろん全くしないよりも良いことですが）、日曜だけ教会に行って霊的な実践はそれで十分ということでは、霊的な進歩はありません。カルマ・ヨーガ、バクティ・ヨーガ、ヒンドゥ教、キリスト教、イスラーム教、すべてにおいてそうです。どんなにたくさん勉強しても、霊的な話を聞いても進まないのはyearningがないからです。それがなければ進みません。

**・📖（p28L3）**

***師（バンキンと他の者たちに向かって）「人は神にたいしては、子供のような憧れを持たなければならない。子どもは母親が見えないとただ狼狽するだけだ。たとえお菓子を持たせてなだめようとしてもだまされず、『いや、お母さんのところに行く！』と言う。人はこのように神を慕わなければいけない。ああ、何という憧れだ！　母を求めての、何という焦りだ！　何ものも、母親を忘れさせることはできない。世間の楽しみが味気なく感ぜられる人、金、名声、快適な生活、感覚の楽しみなど、この世の一切のものに喜びを感じない人は、母のお姿を求めて心底から悲しみに打ちひしがれるのだ。そしてこのような人のもとにだけ、母はほかのすべての仕事を捨てて、走って来て下さる。***

・原著（P12 L21）*The Master (to Bankim and others) : One must have for God the yearning of a child. The child sees nothing but confusion when his mother is away. You may try to cajole him by putting a sweetmeat in his hand; but he will not be fooled. He only says, ‘No, I want to go to my mother.’ One must feel such yearning for God. Ah, what yearning! How restless a child feels for his mother! Nothing can make him forget his mother. He to whom the enjoyment of worldly happiness appears tasteless, he who takes no delight in anything of the world──money, name, creature comforts, sense pleasure──becomes sincerely grief-stricken for the vision of the Mother. And to him alone the Mother comes running, leaving all Her other duties.*

「子どもは遊んでいます。お母さんはご飯をつくっています。子どもは遊び終わると大声でお母さんを呼んで泣きます。するとお母さんは自分の仕事を置いて、すぐにやってきます」──この話は『ラーマクリシュナの福音』の中にあります。

それと同じです。金銭、名声、快適な生活、感覚を喜ばせるものを楽しまず、ただ母なる神のヴィジョンだけ、それだけを目的に祈ると、つまりそれほどの心の状態になったら、神はすぐにお姿をあらわします。しかし遊んでばかりいたら、神は「遊ぶのが好きなら、遊んでいなさい」と言います。

『ホーリー・マザーの生涯』の中の話です──劇場の仕事をしているある人が、真夜中にホーリー・マザーの住まいの近くでこんな歌を歌いました（音声データ1:29頃に歌われる）──「マザー、起きてください、起きてください。私は遊びが好きで遊んでばかりでした。だからあなたはそれを気にしてそっぽを向いてしまった。でももう一回私のことを見てください。私はもう遊びません。マザー起きてください。そして私のためにドアをあけてください。私を中に入れてください」。

私たちは皆、遊んでいます。子どもと大人で遊び方は違いますが、霊的な見方ではどちらも「遊び」です。包括的な意味で、私たちは皆、遊んでいるのです。子どものときの（遊び相手である）人形は、木材（など）で作ったものですが、大人になってからは人間の人形（human dolls）をしています──だんなさん、奥さん、息子、娘…。この考えはどう思いますか？

参加者：そのように考えることができたら気が楽ですね。

「気が楽」とはどういう意味の日本語ですか？

参加者：気持ちがあまりイライラしない…。

霊的な見方で「人形と遊ぶ」というイメージは正しいと思います。しかし、どうでしょうか、そこまで考えることはできますか？　それともこわいですか？

参加者：こわくはないです。そのとおりですね。

しかし、家族がある人の場合を考えたら、それはそんなに簡単なことではないことに気づくでしょう。自分の息子が、娘が、だんなさんが、孫が、人形です、というのは。

参加者：今までそんなことを思ったことがなかったけれど、それはとても当たっています。大事な考え方です。

本当にそうです。それが内省ですね、そこまでが識別です。「遊び相手が人形である」という考えは、本当に、識別そのものではありませんか？　それはもちろん難しいことです。識別はそれくらい難しいです。ですがこの考え方は正しいです。そして、そのように考えなければ、そこまで識別しなければ、そこまでのイメージができなければ、神への純粋な愛は生まれません。

もちろん家住者に、義務はあります、絶対に。しかし実践が進めば、義務も遊びだと感じるようになります。なぜなら義務も、一時的なものですから。そして遊びも一時的なものです。ですが実践が進むと、遊びが*tasteless*に感じるようになるのです。私は決して、義務を放棄してくださいと言っているのではありません。義務をしますが「中心は神」ということを言っているのです。愛も、神の関係で、愛します。

スワーミージーはシュリー・ラーマクリシュナに問いましたね、「あなたは私の姿が見えないと言っては泣き、私に自分の手で食べ物を与えようとします。それは執着ではないのですか？」と。シュリー・ラーマクリシュナは「あなたの中に神を見るから私はあなたを愛するのです。あなたに神を見なくなれば、あなたをこの場から追い出します」と答えました。（👉『スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯』p52）

参加者：それを聞いてスワーミージーは安心した。

シュリー・ラーマクリシュナはもちろんあらゆる人の中に神を見ていました。ですがスワーミージーの中に、もっとも偉大な神のあらわれを見ていたのです。だからスワーミージーをそれほど愛したのです。私たちもそのように、家族に神を見て愛せればよいのですが、しかしそれができていますか？　できていないから「人形」と言うのです。わかりますか？　神を見ながら人を愛せば何も矛盾は生じません。タクールもホーリー・マザーも、皆の中に神を見て愛していました。しかし私たちはそれができないので「遊び」と言っています、「人間の人形」と言っています──どうでしょうか？

参加者：だけど、神様が遊んでくれなかったら退屈だから、仕方がないから、人間のドールと遊びます。それはだめですか？

私たちは、口では「神様に遊んで欲しい」と言っていても、本当はそんなに欲しくはありません。そこまでのyearningはありません。ある１秒間はその考えであっても、次の1秒間には別の考えになります。

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

［注１］3つの世界とは、私たちが生きているこの世界（ブーローカ：bhu Loka）、天国、この世界と天国の真ん中の場所の３つ。天国に神々がいるように、真ん中の場所にも生き物がいます。そして神々を見ることができないように、その場所の生きものも見えませんが、聖典ではいるとされています。

［注２］「ヴィシュヌが一番の神」について、この回でマハーラージが説明されたことを記します。

ヒンドゥ教の主な神（3 great main Gods）はシヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーですが、中でもヴィシュヌが最も偉大な神だとする考え方があります。

ブリグ（Bhṛgu）というとても偉大な聖者（7賢者：サプタリシの一人）がいました。彼は、三人の主な神の中で、どなたが一番偉大かというテストをしたいと考えました。彼はまず、創造の神ブラフマーのところに行って、悪い言葉を使いました。するとブラフマーは怒りました。次にシヴァのところに行って悪い言葉を使うと、シヴァもとても怒りました。最後にヴィシュヌのところに行ったらヴィシュヌは寝ていました。それを脚でヴィシュヌの胸をキックして起こすと、（私たちに置き換えて考えれば怒るどころか喧嘩になるところですが）ヴィシュヌは起きて、「あなたのために、私は何のお世話ができますか？」とたずねました。そのときブリグは理解しました。一番我慢強く、エゴが全くないヴィシュヌが最も偉大だと。

もし皆さんが困ったら、ブラフマーのところに行っても、シヴァのところに行っても助からないかもしれません──一度シヴァはとても困ったことがありました。ある悪魔がシヴァを喜ばせるためにとても大変な霊的実践をしたので、シヴァがあらわれて「あなたの願いは何ですか？　それを叶えましょう」と言いました。（シヴァは喜ぶのも一番早く、怒るのも一番早いです。スワーミージーはシヴァの性質を持っていました。だからある瞬間とても怒り、次の瞬間とてもやさしい。スワーミージーはベナレスのシヴァに祈って生まれた子供でしたから。👉『スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯』p26）その悪魔は「私が人の頭に手を置くと、その人は灰になる」という願いをシヴァに伝え、シヴァは深く考えずにそれを叶えました。そのあとその悪魔は本当にその力が授けられたかどうかを知りたくなって、シヴァの頭の上に手を置いて試してみることにしました。シヴァは怖がって逃げ、ヴィシュヌに助けを乞いました。ヴィシュヌはシヴァを追いかけ走ってきた悪魔に向かい、「そんなに走ってくることはない。自分自身で試したら簡単にわかるでしょう？」と言いました。悪魔は深く考えず、自分で自分の頭に手を置いて、自分が灰になりました。悪魔の名前はバスマーシュラ（Bhasmāsura）、バシュマは灰という意味です。この物語は30年くらい前にベナレスのアドヴァイタ・アシュラムでの講演会できいたものです。その話の結論は、今の文明もバシュマーシュラのようだ、ということでした。たとえば核兵器は人間がつくって人間を破壊します。戦争も人間が人間を殺します。地球温暖化も神のせいではなく、人間によるものです。すべて文明はバシュマーシュラ、suiciderのようです。

［注３］この中に登場するナラシンハについて説明があった。上半分（見せてもらった絵によると、頭の部分）がライオンで、下半分が人間の姿。ヒンドゥ教ではヴィシュヌ神の化身は１０あるとされているが、その中のひとつである。

（以上）